



てん がん 天願 (ティングワン)

古い歴史と伝統行事

天願は、うるま市の中央部に位置し、北東部は金武湾に面している。かなり古い時代の天願貝塚や霊化森(ディーカムイ)、コシ森などの遺跡や拝所があり、市内でも歴史の古い集落のひとつで獅子舞、ウステーク、巻棒などの伝統行事が継承されている。また、具志川小唄に「豊か村さみ 天願や」と謡われ、豊かな村と知られている。

戦後は、金武湾に面する北東部から集落周辺にかけて広大な基地キャンプ・コートニーをはじめ、天願倉庫、モータープールなどがあり、その基地従業員の居住地として「百件部落」と呼ばれる特別な区域も建設された。

天願橋を越え、コートニーゲートに向かう坂に沿うように左端一帯にはバー、飲食店、理容館などサービスマ業関係の建物がならびネオン華やかな時代があった。

天願の語源と意味

天願の語源については『南島風土記』(東恩納寛惇著)は、次のように記している。

「てんぐわん」も、「テヌクラ」↓「テヌクラ」↓「テクラ」↓「テクラ」↓「テゲワン」↓「テングワン」の転訛であろう。また『伊波普猷全集』(第六卷)は、「天願は、てぐらんの転訛なり」として、その語源に触れている。しかし、両先生ともその地名の意味については説いていない。

そこでその意味について、まずテングワンの語源とされる「テヌクラ」を「テヌ」と「クラ」に分けて考察してみる。テ(テイ)は、突から転訛した地形語で丘陵地や高地を意味する。天願川上流の栄野比にもティーギシと呼ばれる崖地がある。天願集落一帯の地形から丘陵地を意味すると考えられる。ヌは「の」にあたる。

クラ(ン)については「崩壊地形、または湾曲の意で川が曲流しているよすを表す」(大言海)とあり、天願川は現在の天願橋から上流にかけて直線的になっているが、これは改修によるものでかつての天願川は、たび重なる

洪水で川岸が削り取られ、とくに集落付近で曲流していた(略図)。クラは、剣に通じ、テノクラのクラはこれと同義と解される。するとテノクラの意味は「丘陵地で川が曲流するところ」ということになる。

では、いつごろからテノクラ、テグラから天願に定着したのだろうか。一六二一年に編さんされた『おもしろそうし』には「てくらん」、その十数年後にできたといわれる『琉球国高究帳』に天願村、一七二三年に編さんの『琉球国由来記』には、「天願ノロ」が見える。

このことから十七世紀の前半から中ごろに「天願」の地名が定着し、現在に至ったと考えられる。

ミンタマヤー

天願の霊化森の南麓と宇堅の栗原との間に水玉屋原(ミンタマヤーバル)と呼ばれるところがある。ミンタマヤーは人の仇名(あだな)のミンタマー(目玉)で異様な感を受けるが、ここは霊化森や周囲の高所から流れ出る水が溜まるところで「水溜まり」がミジタマ、ミンタマ、ミンタマヤーに転訛した。

県内には多くのミンタマ系地名があるが、市内の石川伊波にはミンタマヤバル(水溜屋原)、恩納村字恩納にはミンタマラ(水溜)、那覇市楚辺にはミンタバル(美武田原)、宜野座村字祖慶にミッターバル(水溜原)、恩納村字山田にはミジタマイバル(水溜原)、今帰仁村字仲尾次にはミンタマイ・ミンタマヤーポロ(水溜原)などがある。いずれも水溜まりやため池みなど埋め立てられて畑や宅地になり、昔日の面影はない。

【改修前の天願川の流路】

